

## 【進化し続ける顔】

原島 博 先生 基調講演

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府 教授、同工学部電子情報工学科兼任  
日本顔学会 会長



はじめに

まず自己紹介と日本顔学会の紹介をさせていただきます。

私、原島博と申します。東京大学大学院の情報学環で教授をしておりますが、今日は日本顔学会の会長としてここに出ております。

私は、1945年生まれで、昨年秋にめでたく還暦になりました。経歴は、今から40数年前に大学に入って、ずっと同じ大学にいて現在に至っております。

顔学会は1995年3月に発足、昨年10周年を迎えました。顔学会というとオタクっぽい学会のようですが、現在会員が約850名というちゃんとした学会です。

活動は多様で、学会誌「顔学」を年1回、ニューズレターを年3回出し、東京大学でイブニングセミナーを年数回行っています。9月末には「フォーラム顔学」という大会がありました。

もう一つ重要な行事として一般公開のシンポジウム「顔」を開催しておりました。ところが小さな学会ですので予算が厳しくなって休止しようかというときに、花王芸術・科学財団さんからシンポジウム共催のお申し出をいただき、今回の開催に至りました。

花王という名前も、もともと顔をきれいにする石鹸ということで「顔」から来ているとうかがいました。まさに相性のいい相手ですので、顔学会がこれから花王芸術・科学財団といっしょに3年間シンポジウムを開催させていただきます。

今日、公開シンポジウム『顔と文化』シリーズの第1回として、「進化し続ける顔」をテーマに討論を行います。馬場先生、長谷川先生から、顔は進化によって変わってきて、今も進化し続けているという話を、そして最後はロボットまで話を広げていきます。

顔は変わる、変えられる

顔が今も変わり続けているということは、実は日本顔学会にとっては非常に重要なことで、ある意味で変わるから顔学があり得ると私は思っています。

今まで日本では、顔について議論することはどちらかというとタブ

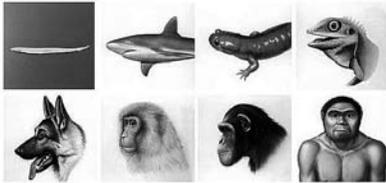
一でした。「人間顔じゃないよ、心だよ」といって、顔について議論するより「心を大切に、顔はどうでもいいよ」というような文化があったわけです。

それは顔は親からの授かりもので、一生変えられないもの、あるいは変えてはいけないものという考え方が、おそらく背後にあったからだと思います。自分が努力によって変えられないものだとしたら、いい顔だ、悪い顔だと、変えられないものに対して優劣をつけることは差別になりますね。この顔はどうだ、あの顔はどうだと言うことが差別なら、下手をすると顔学そのものが差別になってしまい、学問として成り立たなくなってしまう。

ところが顔は変わる、変えられるということになると、様子が変わってきます。実際顔は変わる、変えられるということを前提とした言葉はいくつかあって、評論家・大宅壮一さんは、「男の顔は履歴書だ」とおっしゃいました。また、リンカーンは自分の顔にコンプレックスがあって髭を生やしていましたが、「男は40過ぎたら自分の顔に責任を持て」と言ったそうです。両方とも「男」ですが、女性も同じだと思います。顔は変わる、変えられるから履歴書になり、あるいは責任を持つということになるわけです。

私自身も、顔は環境や気の持ち方によって変わると思います。とすると、自分の努力で顔を変えようと思えば変えられるわけですから、どういふ顔がいいのか、自分の努力目標としてのいい顔を探ることは非常に重要になってきます。顔学も役に立つ学問であるということになります。

### 動物的な進化によって 変わってきた



大顔展図録より イラスト:石井礼子

### 人類学的にも変わってきた



### 顔の変化

それでは顔はどのように変わってきたのでしょうか。あとで詳しく先生方からお話があると思いますが、基調講演はある意味で概論、イントロダクションですのでさっと見ていきますと、たとえば動物的な進化によって、ナメクジから魚類・両生類・爬虫類・哺乳類と、変わってきました。

これは1999年～2000年に開催された大「顔」展の図録の絵です。一番右側が人類ですが、人類学的にも顔は変わってきています。チンパンジーから猿人・原人・旧人、日本人の基が

湊川人で、湊川人から日本人の顔も、縄文・弥生・古墳・江戸・現代と、確かに変わってきています。ここは人類学の領域ですが、今も顔は変わっていて、だんだん私の専門領域になってきます。

今研究室では、平均顔といって、コンピュータソフトを使って10枚、20枚、時には100枚と、たくさん写真を集めてその平均の顔を作成しています。

たとえばこの3枚、左側は明治の芸子さんの平均顔、真ん中は大正の丸の内働く女性の平均顔、右側は平成のある研究所の女性研究員の平均顔です。女性の顔の変化をみると、なんとなくそれぞれの時代をイメージさせる顔になっていて、時代の顔というのはどうもあるようです。

左側はある高校の卒業アルバムの写真から取った、50年前の高校生の平均顔、その右側が同じ高校の最近の高校生の平均顔です。印象だけでなく、顔形も変わっているようです。右側も女子高生の50年間の変化です。

こういう短い期間に遺伝子が変わっているはずがないのに、顔が変わっているのは、やはり時代や環境、生活習慣、気の持ちようが顔を決めているということがあると思います。これからも変わるかもしれません。

私と馬場先生とは、10年以上前にある科学雑誌をきっかけにお会いしました。科学雑誌「New ton」の依頼で100年後の日本人の顔がどうなるかというテーマで、馬場先生が仮説を立てて原稿をお書きになりました。そして馬場先生が頭蓋骨のスケッチを描き、それに肉付けしてほしいと依頼があり私どもが肉付けをしたのです。

#### 顔の変化の要素

縄文時代の日本人の顔、その後だんだん弥生が混ざって現代の顔になり、未来はこのような顔になるだろう

### 日本人の顔も変わってきた

縄文 弥生 古墳 江戸 現代



(大顔原図群より イラスト:石井礼子)

### いまでも変わっている



女性の顔の変化 (明治、大正、平成)



高校生の顔の変化 (50年前と現代)

### これからも変わるかも知れない



100年後の日本人の顔?

というシミュレーションも、このときいたしました。この未来顔は必ずこうなるというよりも、むしろ日本人の今までの顔の変化、特にここ50年間の顔の変化がそのまま続いたら、この間に遺伝子が変わるわけではないのに顔はこうになるというシミュレーションです。

他にも顔はいろいろな要素で変わります。たとえば個人の一生の中でも、年齢によって変わります。赤ん坊からだんだん年取っていくと、顔がどのように変わるか、これも非常に重要な話題です。

### もちろん年齢によって変わる



これは右も左も私です。左側は30代半ばの私の似顔絵です。30代の私は、ある意味で未来顔で、けっこうかっこよく描いてあります。右の最近の私の似顔絵と並べてみると、顔学的に年を取るとはどういうことか、明確にわかります。吊り上がっていた目尻が下がって、目が八の字型になる。髪の毛が上に上がる。鼻唇溝(びしんこう)ができて、逆三角形だったのが重力に負けてきます。

### 職業によって変わる



それから職業によっても変わります。同じ職業の人の写真を集めてその平均を取ると、それぞれの顔は個性がありますが、平均顔は個性が打ち消されて、その職業に共通の顔の性質が浮き彫りになります。

左が銀行員、そのとなりがプロレスラーで、次はかつての自民党の派閥の親分クラスの政治家、中曽根さん、森さんなど10人が入っています。その中の竹下さんは、10分の1のはずなのに4分の1ぐらい彼の特徴が入っていて、相当に個性の強い政治家だったことがわかります。Jリーグとプロ野球選手の顔もなんとなく違います。一番右側が

K-1選手で、亡くなったアンディ・フグというスーパースターにそっくりの顔になりました。

### この職業は何？



これは両方とも女性の憧れの職業ですが、どちらが何かだいたいおわかりになるでしょう。左側はアナウンサーで、右側は客室乗務員です。航空会社によっても少し平均顔が違ってきます。

このように職業によって顔が違うのは、いったいどうしてなのでしょう。たとえば銀行員の平均顔は、いかにも銀行員であるのはなぜでしょう。採用時は、たぶん皆学生の顔をしていたと思います。銀行員になって、そういう職場の環境の中にいる、あるいは自分が銀行員になったという気持ちになると、気の持ちようによって、やはり顔というのはつくられてくるのではないかと思います。銀行員が銀行員の顔になったとき、おまえも一人前の銀行員になったと周りに言われるわけです。

このように職業だけで顔が変わってくるということは、考えてみれば怖いことでもありますね。自分の本当の顔ではなく、むしろ環境やたまたま就いた職業によって自分が決まってくるということです。

実は私はつい最近まで日本アニメーション学会の副会長もしておりました。アニメの顔はどうかというと、やはり変化しています。特に長く続いたアニメや漫画は、初期のころと、長く続いた終わりのほうでは、顔が変化しています。

有名なのはミッキーマウスです。最初は目が真っ黒で、どちらを見ているのかわかりません。それが大きい白目に黒目を置いて、それを動かすことによって表情豊かになり、顔も全体に丸くなってきました。ドラえもんは、最初は三頭身でしたが二頭身に変わり、スヌービーも顔が丸くなりました。

驚くほど劇的に変わったのはアンパンマンです。1968年にアンパンマンが誕生した時、その5年後、今を比べると指はなくなり顔も大きくなりました。

ハローキティは1974年に誕生し、あまり変わっていないようですが微妙に変化しています。その変化をモ-フィンクにより示してみると、顔がだんだん丸くなり目と目の間隔が狭まって、鼻が上に持ち上がり、リボンが花になっています。

そして徐々に年齢を下げて赤ん坊になりました。昔は親が子どもに、「かわいいでしょ」と買い与えた同い年のキティが赤ん坊になって、女子中学生、女子高校生が「あら、かわいい」と、自分で買うキャラクターになり、爆発的に売れるようになりました。親が与えるには限界がありますが、中高生が自分で買うと市場が一気に広がったということが、確かに顔に出ています。

このようなキャラクターの変化には、法則があることがわかります。どれも共通して顔が大きくなりました。ドラえもんは三頭身だったのが二頭身になり、アンパンマンも顔が大きくなり、よりシンプルになっていきました。

こういう変化がアニメにだいたい共通して起きているのはなぜでしょう。顔学を持ち出すまでもなく、われわれが人の顔に対して持つ

イメージを考えると当たり前のことですね。あまり相手との関係が深くないときは外見を見ます。ところがだんだんその人が身近な存在になって親しみが湧いてくると、印象の中で顔の占める割合が大きくなります。そのうえ表情も豊かになり、かわいくなる傾向があります。アニメは長く続くことによって、この法則に則って変わってきたのです。

そう考えると、顔というのは単に物理的、客観的に存在するものではなく、それを見ている人との関係において変わってくると言えるのではないかと思います。

とりあえずの結論に入ります。いろいろな例を見てきて私が思うのは、顔は変わるということです。遺伝による進化、DNAが変わることによって当然顔は変わりますが、それだけではなく、環境や気の持ちようによって変わるということです。

さらに言うと、環境によって変わるということは、顔というのは客観的に存在するものではなくて、見る人と見られる人の間の関係によって決まる、同じ顔でもどういう気持ちで見るとかによって見え方が変わると思います。これが僕の顔に対する基本的な見方です。

たとえば、指名手配の顔は悪く見えます。その人が悪い人だと思っ  
て見るから悪く見えるので、その人が自分の身近な人で実は悪くないと思えば、悪く見えないかもしれません。

重要なのは、顔というのはイメージが重ね焼きされるということです。われわれは顔を客観的に見ているのではなく、予めその人に対してあるイメージを持っていて、それを顔に重ね焼きして見るので、イメージが良ければ良く見えるし、悪ければ悪く見えるのです。

そう考えると、先ほど言った、「人間顔じゃないよ、心だよ」というのもそれなりに意味を持ってきます。「人間顔じゃないよ、心だよ」とは、心さえ良ければ顔はどうでもいいのではなくて、心が良ければイメージが良くなり、顔も良く見える。顔を良く見せるためにも心は大切だと考えれば、「人間顔だけじゃないよ、心も大切だよ」ということです。

まとめに入りますが、相手との関係で顔の見方が変わり、顔も変わります。

「進化し続ける顔」と題して、いい顔になるために顔の進化をさまざまな観点から探ってみようと、3人の先生方にこの後いろいろな立場からお話しいただきますが、それは単に進化し続けていることを学ぶだけではなく、変わり続けているから、誰もがこれからいい顔になれるということです。

どうぞ、心ゆくまでお楽しみください。